

人間文化研究機構グローバル地域研究推進事業  
東ユーラシア研究プロジェクト（EES）2024 年度全体集会開催報告

2025 年 1 月 25 日に、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターにて、人間文化研究機構グローバル地域研究推進事業東ユーラシア研究プロジェクト（EES）2024 年度全体集会を開催した。形式は、対面とオンラインの併用であった。会議では、東ユーラシア研究プロジェクト全体および各拠点の目的と計画・成果について情報共有・意見交換を行い、今後の相互交流や成果発信のあり方について議論を行った。

全体集会は、(1) 基調講演、(2) セッション 1 EES 北海道大学拠点パネル、(3) セッション 2 拠点間パネルの 3 つのプログラムにより実施した。

(1) 基調講演では、EES 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点長で、長崎大学グローバルリスク研究センターのセンター長でもある岩下明裕が「グローバルリスクとしてのユーラシア」と題して、東ユーラシアのグローバルリスクについて包括的な理解を提示した。さらに、移民とジェンダーに関する論文集の刊行に向けて、戦争・紛争などをキーワードとして、北大拠点内で活発かつ緻密な議論を行っていることも報告された。

(2) セッション 1 「EES 北海道大学拠点パネル」では、個別テーマの概要と紹介を青島陽子（北海道大学）が行い、国際連携に積極的に取り組んでいることを示した。個別テーマの研究内容と取り組みとして、松本祐生子（北海道大学）が「戦争における越境とジェンダー」と題して、第二次世界大戦終結 80 年を意識した報告を行った。

(3) セッション 2 「クロスボーダーとウェルビーイング」では、東北大拠点の川口幸大（東北大学）が「食から考える「マイノリティ」のウェルビーイング：ヨーロッパ・アフリカ・中南米における東アジア系移民のよき生をめぐって」、民博拠点の王柳蘭（同志社大学）が「北タイ国境における差異と開かれた記憶に向けた葛藤——コモンプレイスの構築は可能か」、神戸大拠点の李定恩（立命館大学）が「フィリピン人女性のジェンダー化した「移動」と労働：フィリピンの英語学校の英語講師の経験に着目して」というテーマで報告し、北大拠点の堀江典生（富山大学）がコメントを行った。本セッションでは、北大拠点の個別テーマである越境とジェンダーをテーマとして、身体的・物理的な空間の越境に限らず、文化的あるいはオンライン空間での越境も含め、移動がもたらした人々の生活への影響を広く検討することを目指した。EES の共通テーマであるウェルビーイングに関する理論的整理から、個別の事例の間の対照・比較まで、バランスの取れた報告と議論が行われた。

全体集会には、対面で 51 名、オンラインで 9 名が参加して、大変盛況であった。翌日の若手研究者集会にも、対面で 47 名、オンラインで 5 名が参加して、二日間にわたり活発な議論がなされた。